



幼馴染みのAV男優が、

私にだけ狂った独占欲をむき出しにしてくる 体験版

幼馴染みのAV男優が、
私にだけ狂った独占欲をむき出しにしてくる
完結編



※画像はPixAIで作っています※

【本作をお読みいただく前に】

本作は、ヒロインを愛するあまり狂った独占欲を見せるヒーローとの、激しく濃厚なロマンスを描いた作品です。

読者の皆様に安心してお楽しみいただくため、以下の要素が含まれることを予めご了承ください。

【過激な描写】

作中、ヒーローによる重めの愛撫、ヒロインの奉仕（フェラ）が含まれます。

シチュエーションおよび、過激な性描写（ポルチオ・中出し）が苦手な方は、閲覧をお控えいただくか、ご注意の上お楽しみください。

登場人物紹介

・天音 紗良（あまね さら）／アマオト

本作のヒロイン、女性向けAV脚本家

ヒーローとは幼馴染で同業者。テレビドラマの脚本家を目指す、現在はAVの脚本家。

・星川 蓮（ほしかわれん）／レン

本作のヒーロー、人気イケメンAV男優

表向きは幼馴染を装っているが、裏では紗良に対して狂氣的独占欲と執着心を隠し持っている。

1、すれ違いの日常

深夜一時を回った自室に、怒ったようなタイピング音だけが反響している。

あまねさら

天音紗良の顔は疲れ果てていた。ここ数日の平均睡眠時間は三時間を切っているのが原因で、目の下には濃いクマが刻まれている。

『自分では到達したことのない深い部分にペニスが打ち付けられる熱に、腰の動きが無自覚に止まらなくなっていく。喘ぎ声は大きくなり、ピストンの音が部屋中に響く。言葉などなくても、好きが伝わってくるように見つめ合い、貪るようにお互いを求める——』

指先で紡ぎだしているのは、男女が絡まり合う濃厚な官能のシーンだ。

紗良が女性向けAVのヒットメーカー『アマオト』として活動を始めてから数年。さらにヒット作を出したことによって、生活は完全に不規則でプレッシャーが多い。

そして、あのスイートルームでの「特別取材」から四ヶ月。

企画ものが予想を遥かに超える大ヒットを記録したことで、今までになく、たくさんの脚本依頼が来るようになっていた。

その一方で制作サイドからの期待値は上がっており、今回の新作脚本はさらに高いクオリティと女性ならではの視点を求められている。

紗良は頭も指もフル回転させて脚本に取り組んでいた。しかし、書けば書くほど、心の中では何かを失っていくような感覚が伴う。

ここ最近、頭が働かなくなってしまうことが続いていた。

淫らなシチュエーションを考えようとしても、なかなかうまくまとまらない。焦燥感が募り、ぼさぼさの髪の毛を掻きむしってはため息を吐く。

「……はあ。疲れた……」

キーボードを叩く手を止め、ソファの背もたれに深く体重を預けて休んだ。

脚本を書くのは好きだ。自分の作品が喜ばれるのはとても嬉しい。

ただ、紗良が本当に書きたいのはテレビドラマの脚本だから、現状に不満があるというよりも、自分のスキル不足に納得できていないのだった。

「こうも根詰めると、またすっからかんになっちゃうよー」

誰にともなく独り言を言ってから、冷めてしまったコーヒーを飲む。

そして、紗良の心を疲弊させているもつともな原因は、幼馴染であり、今やトップAV男優となっ

た『レン』こと星川蓮ほしかわれんとの曖昧な関係であることは間違いない。

スイートルームでお互いに『好き』という感情をむき出しにして、身体の最奥まで貪り合った、あの日。

それ以来、蓮が自分に向けてくる視線が単なる幼馴染のそれではなく、ドロドロとした執着であることを紗良は知ってしまった。

あれから幾度となく身体を重ねている。

蓮の大きな身体を思い出すだけで愛おしい気持ち がせり上がってくる。自分を壊すように愛撫してくる強烈な熱に、完全に依存してしまっているのだ。

けれど、正式に『恋人』という関係には踏み切れていない。少なくとも紗良はそう思っている。

「――好きとは言われたけど……」

蓮から明確に恋人として『付き合おう』とは言われていない。

それが紗良の心の中で、不安の種になってむくむくと育ってしまった。

紗良も蓮も二十八歳といういい大人だ。

恋愛に割ける時間は、この先きつと限られてくる。今の状態を恋人と呼ぶのかセフレと定義するか、そんなことばかりを考えてしまう自分がいた。

蓮に拒絶されることを恐れ、今の関係に名前を付けられず、確かめることもできずにいる。聞けば済むだけの話なのに、間違いない紗良は関係が壊れるのが怖かった。

『お前の身体に俺の形を覚え込ませる』

そんなようなことを毎回言われているが、それは果たして恋人と同義なのだろうか。

「あーやだやだ、大人になって面倒くさくなっちゃった！」

身体だけ満たされればいい、と割り切れるほど単純ではない。心まで蓮に満たされたいと思ってし

まう、わがままな気持ちを抑えられない。

（そもそも蓮は女優さんと寝てるし、相手が私になった違いといえば、仕事かプライベートかというだけで……私だけ特別って言われても、どうやったら確信に変わるんだろう？）

考え出すと、胸の奥が嫉妬と不安でいっぱいになる。思考を止めたくて無理やりにでも仕事へ没頭しようとしていた。

名前のない関係にモヤモヤしたって、曖昧な快楽に終止符を打つ勇気なんてどこにもない。気持ちだけが、いつも置いてきぼりだった。

（蓮のことが好き……好きだから……）

——ブツ。

机の上で携帯電話が短く震えた。画面を見ると、『蓮』の名称が表示されている。

『そっち行っている？ 会いたいんだけど』

画面に躍る短い文字列を見つめたまま、紗良は息を詰まらせた。

文字を見るだけで、下腹部の奥が切なく疼くようだ。蓮の熱を受け入れてから、何もかもがおかしい。彼がいない夜を寂しいと思ってしまう。

割れ目がじわりと熱を帯びる感覚に、紗良は自分の頬をつねって叱咤する。

蓮の匂いが恋しい。あの大きな手のひらで身体を撫で回され、頭の芯が蕩けるような快感に溺れた。本当は今すぐ『来て』と返信したかった。

しかし液晶画面の隅では、締め切りがあと十時間であることが表示されている。その文字が紗良の理性を現実を引き戻す。

「……無理。今夜は本当に無理だ……ダメだ、こんなんじゃダメ」

まだ原稿は半分も終わっていない。

仕事を理由に蓮を遠ざけて二週間も経っている。今から蓮が来れば、間違いなく朝まで身体を重ねてしまうのはわかっていた。そんなことをしたら、締め切りを落とすことになりかねない。

『ごめん、新作の締め切りが本当にギリギリ。連日徹夜で限界！今夜は仕事に集中させて。落ち着いたら連絡するから』

送信ボタンを押した瞬間、罪悪感と寂しさが胸に押し寄せた。

携帯電話の画面を見ないように机に伏せ、コーヒーを大きく口に含む。苦味だけが口内に広がり、虚しさが広がっていった。

「集中しなきゃ。書かなきゃ、私だってもっと頑張りたいし認められたい……」

自分に言い聞かせるように呟き、再びノートパソコンに向き直る。

文字を打ち込み始めて数分。伏せられていたスマートフォンが激しく震え始めた。

——プルルッ！ プルルルッ！

集中が途切れてしまい、携帯電話を手を取った。画面には、再び『蓮』の文字が見えている。迷ったが、これ以上無視するわけにもいかず、通話ボタンを押して耳に当てる。

「……もしもし、蓮？ メッセージ読んだ？ 本当に今夜は——」

『徹夜って何だよ。お前、また飯も食わずに部屋に籠もってんだろ』

受話器の向こうから、蓮の苛立った声が聞こえてきて、思わず紗良は電話を遠ざける。

「……仕事なんだから仕方ないでしょ。今回、制作サイドからの要求も厳しくて、本当に締め切り落とせないの。お願いだから邪魔しないで」

『邪魔ってなんだよ。こっちはずっとお前のことを考えて心配してんだぞ。最後にちゃんと寝たのいつ

だよ』

「蓮だって、撮影が詰まってるときは寝ないで現場行くじゃない」

売り言葉に買い言葉で、心までもが尖っていく。

蓮の仕事を引き合いに出したのは完全に八つ当たりだったが、紗良も余裕がなかった。電話の向こうで、蓮がチツと低く舌を打つ音が聞こえた。彼が真面目に怒るときの癖だ。

『お前さ、そうやって最近ずっと仕事のせいにして、俺のこと避けてるだろ』

「避けてなんか……」

『締め切りがヤバいなら、隣で見てやるって言ってるだろ。それとも、俺の顔見ると、エロいことばっか考えて原稿進まなくなる？』

「違うわよ、バカ」

怒る気力さえ沸いてこなかった。本当は抱き締められて、蓮の太い腕の中でゆっくり寝たい。全身

にキスされて、頭を撫でられながら眠りたいと思っている。その欲望を見透かされているようで、紗良は恥ずかしくなつてぎゅつとこぶしを握り締めた。

『俺に触れられたいって思つてるだろ。隠したつて全部わかつてるからな』

あまりにも掠れた甘い声を出されてしまい、紗良は切なくて唇を引き結んだ。

受話器を持つ手がかすかに震えている。紗良は呼吸を整えると、必死に声を出した。

「とにかく来ないでね、ごめん！」

一方的に通話を切断し、今度こそスマートフォン電源を切ると、部屋の向こうへ放り投げた。

静寂が戻った部屋で呼吸を整えながら、自分の顔が信じられないほど赤くなっているのを自覚していた。

「なんなのよ、もう……っ！」

頭を掻きむしり、無理矢理パソコンの液晶画面に視線を戻す。

『――俺の顔見ると、エロいことばっか考えて原稿進まなくなる？』

『――俺に触れられたいって思ってるだろ。隠したって全部わかってるからな』

『――こっちはずっとお前のこと考えて心配してんだぞ』

しかし、蓮の声が脳内で何度もリフレインし、なけなしの集中力は木っ端みじんに霧散してしまっ
た。

「なによ、人の気も知らないで……触られたいわよ、バカ！」

仕事に集中したい。今こそ飛躍のチャンスだとわかっている。

それと同時に、蓮と正式に付き合っていない歪な関係のせいで、焦燥感が倍増していく。

（脚本書かなきゃ、書かなきゃ私の存在意義がなくなっちゃうのに……）

キーボードに置いた指先はピクリとも動かない。

頭の中は、締め切りの恐怖と同時に、星川蓮に完全に侵食されてしまっていた。

外では冷たい雨が降り始めている。窓ガラスを叩く規則的な雨音を聞きながら、紗良は気を紛らわせるために最近女性に人気のAVを観ることにした。

いつもならインスピレーションが湧いてくるはずなのに、頭はずっと働かないままだった。

2、強引な押しかけとお泊り

外の雨は勢いを増し、激しく窓ガラスを叩いている。薄暗い部屋で参考動画を観ながら、結局原稿を進められないまま紗良は一息ついていた。

コーヒーを淹れ直し、机の周りを片付けて気を紛らわす。

トゲトゲした心とは裏腹に、蓮の言葉を思い出すだけで身体が疼いてしまう。触れたいし、触れられない。幼馴染としての安心感以上のものを、蓮に見出してしまっている。

自己嫌悪に髪の毛をぐしゃぐしゃ搔いていたその時。

カチャ、と玄関の鍵が開く音がした。

「……え？」

ハッとして振り返ると、玄関から蓮がこちらに向かって歩いてくるのが同時だった。声も出せないままぼかんとしていると、蓮は濡れた髪を無造作に掻き上げながら、ずんずんとこちらに進み入ってくる。

昔、紗良のおせっかいな母親が蓮に渡してしまった合鍵を、蓮は当たり前のように持っている。蓮はそれをポケットに放り込み、不機嫌そうにこちらを見ってくる。

「蓮……！？ 来ちゃダメだって言ったのに……！」

「お前が、今にも泣きそうな声で電話切るからだろうが！」

初夏の雨の匂いと、彼特有のかすかなムスクの香りが、一瞬にして紗良の狭い部屋を満たしていく。怒っているのか、不機嫌を隠そうともしていない。紗良は思わずソファの上で身を縮めていた。

蓮はムツとしながらリビングに来ると、パソコン画面に映っているAV動画をチラリと見て鼻で笑った。

目の下の濃いクマと、連日の徹夜でカサカサになった唇を見られるのが恥ずかしくて顔を背ける。すると、彼の端正な眉が不機嫌そうに歪んだ。

「……来ないでって言ったじゃない。私、本当に原稿がヤバいの。邪魔されたら間に合わない」

蓮はそんな紗良の抵抗を吹き飛ばすように吐息を漏らすと、長い腕を伸ばしてきた。

「あ、ちょっと……っ」

悲鳴を上げる暇もなかった。蓮の大きな手が紗良の細い腰と膝裏に回り込む。そのまま軽い動作で身体を強引に抱き上げられてしまう。

「……っ！ 蓮、下ろして！」

「バカ。今すぐ仮眠だ。体調崩しでもしたら、脚本どころじゃねえだろ」

「寝られないの。あと十時間で半分も残ってて——」

「俺がいるから」

彼の瞳の奥にある熱量に触れた瞬間、紗良は何も言えなくなってしまった。蓮は紗良を自分の胸にすっぽりと収めるようにし、ソファへどさりと腰掛けた。

「紗良はさ、昔から無理しすぎなんだよ。頑張ってるのはわかってるけど、心配かけすぎ」

頭の天辺で蓮が深く息を吸う。あまりにも愛おしむような声音に紗良の身体中が熱くなってきた。返事をする間もなく、蓮とびったりくっついたまま、横向きにソファに倒れこんでいた。

「くっついてると気持ちいいだろ？」

部屋着越しに、蓮の熱と鼓動が伝わってくる。後ろから抱き締めてくる腕は太く、ぬくもりとともに紗良を包み込んでくれる優しさが伝わってきた。

大きな手に頭を優しく撫でられると、子どもに戻ったかのような安心感に包まれる。

いつの間にか唇が耳や首筋に軽く落とされていて、そのそばゆい心地よさに瞼が下りてくる。蓮のキスは紗良をついばむようでありつつも、熱を確実に与えてくる強さだ。

「頑張ったな、紗良。ひとまず休め」

「……蓮……」

信じられないほど優しくよしよしとされてしまい、抗えないほどの眠気がやって来る。ちよつとだけなら眠れるかもしれないと目をつぶろうとしたが、パソコンの画面が視界の端に入ってしまう。すると、途端に脳が覚醒モードになってしまった。

「か……書かなきゃ」

パソコンに手を伸ばそうとすると、手首を掴まれた。

「俺の言うことを聞け」

怒った声と同時に、蓮は紗良の指をパクツと口に入れた。

「――!?」

驚いていると、蓮の舌が指の間を舐め始める。ぞくぞくする感覚に紗良の背中がブルリと震えた。

蓮はさらに手のひらや爪の先に唇で触れる。

「紗良ならできる。だから、寝ておけ。一時間で起こしてやるから」

彼の体温と優しさに触れて、張り詰めていた緊張が音を立ててぷつりと切れた。

紗良は蓮の腕に抱かれながら小さく頷く。見上げると、蓮は低く笑って紗良の長い髪に何度も愛おしそうにキスをしてきた。

彼の長い指が紗良の首筋をなぞる。ダメだとわかっているのに、磁石のようにどちらからともなく唇を重ねていた。

蓮の舌が口内のぞわぞわする部分を擦っていき、唾液が絡まり合う音が雨音に混じる。蕩けるようなキスに身体から力が抜けてきた頃合いで、蓮の手が紗良のジーンズの中に入ってきて、迷わずにシヨーツをなぞった。

「……っあ」

「映像見てたからか……中、ほぐれてるな」

下着の隙間から滑り込んだ指先が、愛液でドロドロになっている紗良の割れ目にゆっくりと入れられる。

何もかもを吹き飛ばすような蓮の愛撫が、静かに紗良の身体を侵食しようとする。

「れ……っ、蓮……エッチするのはダメ……っ」

「緊張して寝れないんだろ。ほぐしてやるから」

蓮はシャツを脱ぎ捨てると、紗良の目元に被せて視界を塞いでしまう。両手を握ったまま、脚を大きく広げられてしまっていた。

「れ……蓮……!」

「可愛い、紗良。まずは疲れをとってちよつと寝ろ」

蓮の舌が、期待に熱くなる秘部にあてがわれると同時に、蜜壺をぺちやぺちやと舐め始めた。

3、甘い焦らし

視界を塞がれることが、これほど快楽への期待を底上げするとは知らなかった。

目元に被せられた蓮のシャツは、彼の体温と雨の匂いが混ざり合っている。ムスクの香りが鼻腔に広がり、紗良の脳をすでに甘く痺れさせていた。

暗闇の中で、紗良の感度は恐ろしいほど研ぎ澄まされる。蓮の濡れた舌が蜜壺を這い回る生々しい水音と、身体を中心に突き抜けるような快楽に力が抜けた。

「ん、あ……っ、蓮……ダメ、見えないの、こわい……っ」

両手を蓮の大きな手に拘束されたまま、紗良はソファの上で身をよじる。しかし、逃げるための空間などどこにもない。

大きく割られた太ももの間に蓮の頑強な身体が割り込み、逃げ道を完全に塞いでいる。

あまりにも強烈な愛撫に、紗良の身体は震えが止まらなくなっていた。蓮の舌先が、紗良の最も敏感な場所にぴたりとあてがわれる。

それだけで抵抗する力が奪われ、快楽に従順になるスイッチが入ってしまう。

紗良の様子を確認し終わると、信じられないほど繊細な動きで舌が蜜豆を舐め始めた。

「ひっ……あ！　だめえ……」

ペチャ、ペチャと、水分を含んだ淫らな音が響く。

紗良が仕事のストレスと寝不足で身体を強張らせていたのを、完全に見抜かれてしまっていた。眠れない身体を、快感の暴力で溶かそうとしてくる。

クリトリスを舌の平らな部分で包み込むように吸い上げられたかと思えば、次の瞬間には、尖らせた舌先で弾くようにコリコリと執拗に擦られる。

「んんっ！ あ、あぁっ……！」

背筋を電流が駆け抜けるような感覚に、紗良は腰を跳ね上げた。しかし、蓮は紗良の腰を腕でがっちりと掴んで離さない。

「暴れるなよ。もっと力を抜け」

「そ、そこでしゃべっちゃヤダ」

「んー？」

じゅるる、とクリトリスを吸われ、快楽にしか集中できなくなった。温かい蓮の吐息が濡れている箇所に吹きかかると、脳の中央を焼き切られてしまうかのようなのだ。

蓮の愛撫はさらに糖度を増していく。優しいのに、絶対に逆らうことを許さない圧倒的な支配力に満ちていた。

体験版はここまでです。

